



ピースボート災害ボランティアセンター(PBV)

2018年度 活動報告

2018.4.1—2019.3.31



VISION

人こそが 人を支援できる ということ

ピースボート災害ボランティアセンターは、被災地での災害支援活動や災害に強い社会作りに取り組む非営利団体です。誰もが、自然災害に遭遇する可能性があります。国や地域を越えて、すべての人々が互いに助け合える社会を創ることが、困難に立ち向かう力になると信じています。

CONTENTS

- 6 国内外の災害支援
災害に見舞われた地域の回復のために、多様な支援者と共に、被災者のニーズに合わせた支援活動を展開しています。
- 12 防災・減災への取り組み
災害に強い社会を創るため、支援人材の育成や防災教育、ネットワークの構築をおこなっています。
- 16 東北への支援
東日本大震災以降、長期にわたり継続的な支援活動を実施。2016年に地域課題に取り組む団体を設立しました。

【課題】

Cause

取り組む課題

市民が助け合わなければ、
もはや災害には
立向えない。

【使命】

Mission

PBVがすること

想いを
“役に立つカタチ”
にする。

【理想】

Vision

実現したい社会

すべての人々が
お互いに助け合える
社会を創る。



MISSION

「お互いさま」を 共に歩む

いつ、どこで起こるか分からない災害は、
時に私たちを被災者にし、
時に私たちを支援者にもします。
自分を守り、大切な人も守る。
そして少し遠くの「あの人」を支えます。
私たちは、被災者や被災地域の回復のために、
その文化や営みに寄り添い、支援者として
自発的に関わる多様な人々の想いを
具体的に“役に立つカタチ”にします。



IMPACT

28ヶ国(海外)

45地域(国内)

これまでに支援した延べ被災地数

※1995年以降のピースボート災害救援を含む

101,268人

共に活動したボランティアの延べ人数

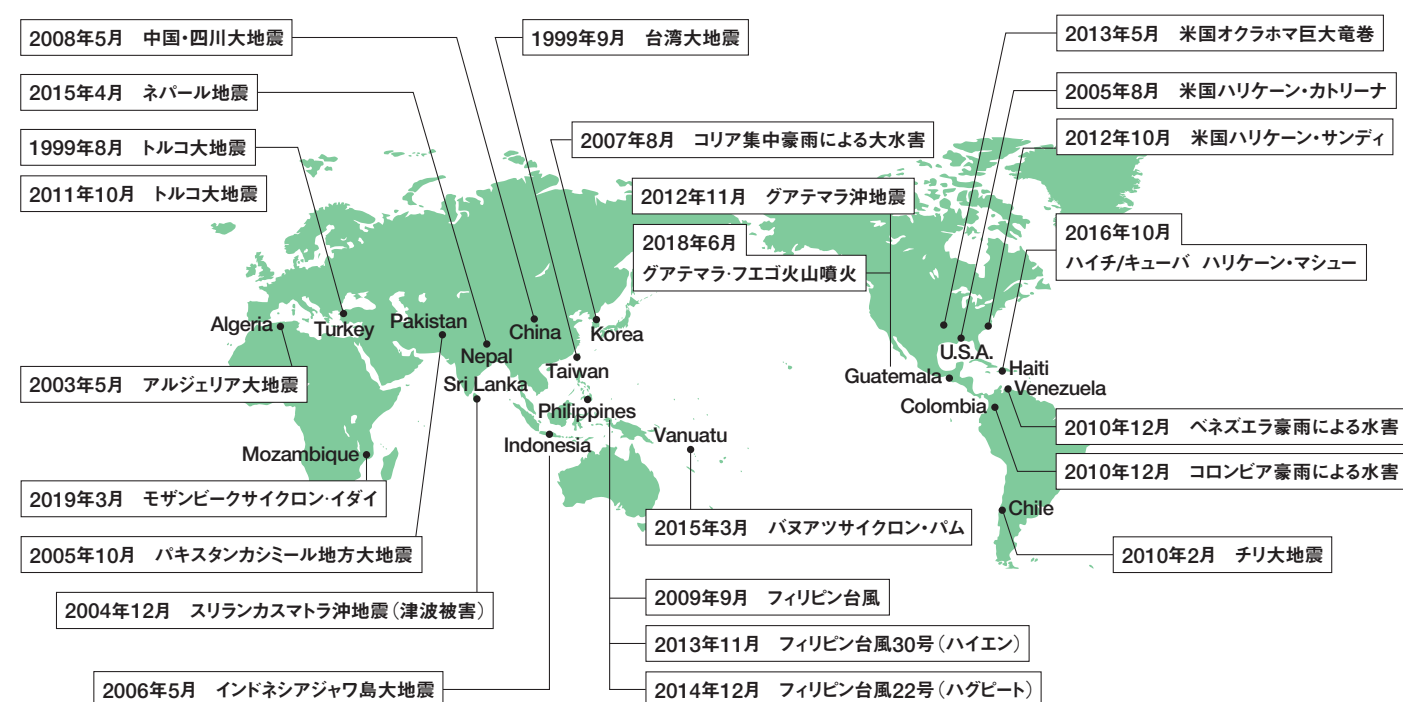
7,660人

災害ボランティアトレーニング修了者



ピースボートの主な災害支援 ※2019年3月現在

海外



ピースボートの主な災害支援 ※2019年3月現在

国内



その地域の人たちには、回復力がある

困難な状況にあったとしても、適切なサポートがあれば、未来に向かう一歩を踏み出せます。
ひとつとして、同じ災害はありません。
そして、ひとつとして同じ支援のカタチもありません。
その時、その場所、その人たちに必要な支援を。

3つのチカラで、被災地を支える

ASSESSMENT

ネットワークを駆使した情報収集と直接現場で被災者ニーズを把握

COORDINATION

課題解決力のある災害ボランティアコーディネート
特徴の異なる多様な組織との協働

SOLUTION

その時、その場、その人に合わせた、多様な支援メニュー



SOLUTION

食事支援(炊き出し)

家屋清掃

物資支援

災害ボランティアセンター
運営サポート

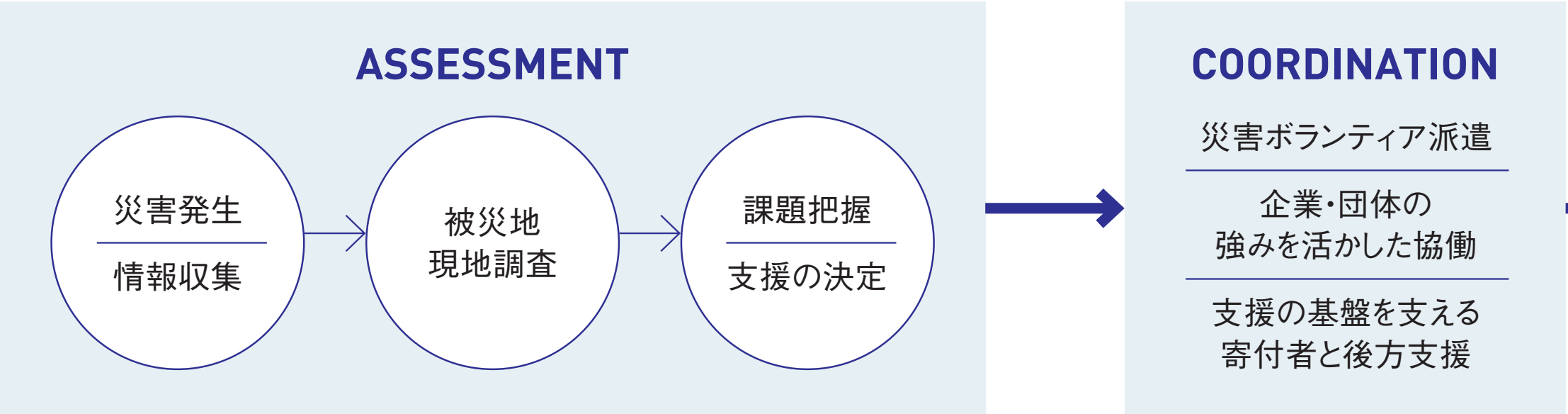
避難所運営サポート

仮設住宅支援

コミュニティ形成サポート

支援団体間調整・
連携サポート

地域産業サポート



西日本豪雨（平成30年7月豪雨）

全国的に広範囲の被害をもたらした「平成最悪の水害」

2018年6月28日から7月8日にかけて、西日本を中心に広範囲で記録的な集中豪雨が発生。広島、岡山、愛媛など11府県で大雨特別警報が発令され、多くの地域で河川の氾濫や浸水被害、土砂災害など甚大な被害に見舞われました。亡くなられた方は237名にのぼり、6,767棟が全壊、11,243棟が半壊となりました。

災害支援で協働の大切さを教えていただいたPBV



社会福祉法人 倉敷市社会福祉協議会
まび復興支援ボランティアセンター 主幹
日野林典人さん

PBVスタッフとは、2017年岡山市で開催された「災害ボランティアセンター運営者研修」で一緒にさせて頂きました。そのご縁もあって、発災後すぐに倉敷市に支援に駆けつけて頂き、一緒に活動できました。活動現場では、これまでの経験を活かし、我々の気付かない多くの点をフォローして頂くとともに、「被災者中心」、「地元主体」、そして「協働」という災害支援の3原則を実際の現場で体現して頂きました。特に、サテライトや被災者支援班の運営にあっては、被災住民と直接対話し、地元行政や他の支援団体と連携し、地元のためになる活動を実践して頂き、被災者の皆さんも感謝しています。活動を共にした仲間としてPBVのこれからの活躍に期待しています。

活動期間

2018年7月9日—継続中

活動場所

岡山県倉敷市、総社市

活動人数

日別延べ活動人数 **5,149人** (457人派遣)

イメージが変わった災害ボランティア



PBV災害ボランティア
油谷彩恵さん

参加前は、災害ボランティアは“過酷”なもので、「経験も知識もない私にできることなんてあるのかなあ」と思っていました。しかし、活動をして現地の方と関わっていくうちに、参加前のイメージや不安は消えていきました。現地の方や、ボランティアとの出会いはとても有意義なものでした。「娘のような存在だわ」と言ってもらえた時は本当に嬉しかったです。人の“温かさ”を感じるとともに、人の“強さ”も感じました。「被災したからボランティアさんたちと出会えた」「被災を機に本当に大切なものに気づくことができた」と笑顔で語る人々を見て、私まで勇気付けられました。復興に携われたことは勿論ですが、“人と人との素晴らしさ”を感じられたことはとてもいい経験になりました。

SOLUTION [実現したこと]

1 家屋の再建を支える

倉敷市社会福祉協議会が開設した倉敷市災害ボランティアセンターの運営を長期間サポートしました。被災地域が広範囲に及んだ倉敷市では、地域の支援拠点となるサテライトが複数設置され、その立ち上げ・運営を担いました。また、PBVでも災害ボランティアの募集を行い、被災家屋からの家財の運び出しや屋内の清掃、カビ被害からの保全などを実施しました。

IMPACT

延べ482件の活動
地域・家屋の復旧を支えました。



2 避難生活を支える

倉敷市職員や応援自治体職員、地域組織などと協働し、3カ所の避難所を閉所までサポートしました。厳しい避難生活でも、避難者のお話に耳を傾けながら日常の暮らしを意識できるよう取り組みました。寝床や食事、トイレ、洗濯、物資配布などの生活環境を改善し、負担を少しでも軽減するためにサポートしました。また、神社や自宅の2階などで自主避難されている被災者への食事支援も実施しました。

IMPACT

3カ所（二万小学校・岡田小学校・熊野神社）の避難所
最大約1,430人の避難生活を支えました。



3 コミュニティを支える

建設型仮設住宅や民間の借り上げ仮設住宅などに移り、町の灯りは消えていきました。地域の皆さんが再会し情報交換やコミュニケーションを取れる場づくりを大切にしてきました。地域で定期的に食事や物資を受け取れる場を提供したり、お茶会やイベントなどを住民と共に開催しました。また、仮設団地の談話室や地区の集会所が住民同士の交流や団らの場になるように、備品を提供しました。

IMPACT

7地域で73回、集う場のサポート



4 支援の申し出と困りごとのマッチング

倉敷市の大きな被害を受けて全国から、物品や炊き出しの提供、専門技術の提供など多くの支援の申し出がありました。支援の申し出（シーズ）を適切に被災者のニーズにマッチングするために、倉敷市災害ボランティアセンターでは「被災者生活支援班」を設置し、窓口と調整業務を担いました。PBVも事務局の一員として立ち上げから携わり、多数の支援団体と連携しながらマッチングを行いました。

IMPACT

158団体と情報共有し、
支援活動につなげるサポート



北海道胆振東部地震

避難所・地域・仮設住宅の生活をサポート

活動期間
**2018年9月8日—
2019年3月31日**
活動場所
北海道
厚真町、安平町、むかわ町

9月6日に北海道胆振東部地方を震源とするマグニチュード6.7の地震が発生しました。震源に近かった厚真町、安平町、むかわ町では、建物の倒壊や土砂災害による被害に見舞われました。また、離島を除く北海道全土で停電が発生する事態になりました。

避難所の環境改善

被害が大きかった厚真町では、町内に6カ所の避難所が開設され1ヶ月以上に渡る運営となりました。避難所運営の中心は、派遣された行政の応援職員で担っていました。PBVでは、簡易照明の設置や子どもたちと一緒に下駄箱づくりなどの生活環境のサポートを行いました。

復興イベントのサポート

地域が元気になる企画や災害対応のイベントに参加し、裏方として運営に協力し、必要な資機材や食材の提供などを行いました。高校生がボランティアとして参加することも多く、災害ボランティアセンターからの依頼で活動のコーディネートにも当たりました。



仮設談話室の環境整備

被害が大きかった3町では、建設型の応急仮設住宅が208戸建設されました。孤立を防ぎ、コミュニティづくりに活かすための団地内には仮設談話室も設置されました。住民が談話室を活用しやすいよう、机や椅子、電化製品、調理道具、AEDなどの備品を提供しました。

仮設住宅の寒さ対策

胆振地方は、冬になると-20℃まで気温が下がります。暖房と燃料がなければ生活できません。仮設住宅の約300世帯に暖房用灯油を支援しました。また仮設談話室に除雪道具や解氷スプレーなどを設置。本格的な冬を前に、寒さ・雪対策の各種物資の提供を行いました。



大阪北部地震 一見えづらい被害を見つめて一

6月18日に最大震度6弱の地震に見舞われた関西。特に大阪府では、一部損壊家屋が約53,000棟にのぼりました。支援者間で情報を共有しながら支援活動を検討。外観からは大きな被害を確認しづらいものの、屋根の損傷による雨漏り被害が相次いでいました。PBVは、高所作業の専門技術を持つ団体のブルーシート張り作業のサポートを担いました。また、要配慮者の実態を把握し、適切な情報を届けるための個別訪問活動も行いました。

活動期間
2018年6月19日—7月29日
活動場所
大阪府大阪市、高槻市、枚方市、茨木市
活動人数
日別延べ活動人数 **59人**

中米グアテマラ フェゴ火山噴火

生活と子どもの教育を支える

6月3日にアメリカ大陸でも有数の活火山のひとつ中米グアテマラのフェゴ火山が噴火。火砕流や溶岩が流れ出し、大量の火山灰が噴出しました。複数のコミュニティがまるごと被災し、約170万人がこの噴火災害の影響を受けました。

トラウマを受け止める心理サポート

多くの子どもたちが孤児となり、また親たちは子どもを亡くしました。子どもたちは遊びを通じて、大人たちはそれぞれの想いを表現できる心理的なサポートが必要でした。ソーシャルワーカーや精神科医と連携し、相談やカウンセリングを受けられるサポートを実施しました。

通学再会のための奨学金プログラム

学費を確保することが難しい家族や子どもたちのために、再び学校へ通えるように奨学金のプログラムを実施しました。奨学金は、子どもたちが幼稚園や小学校で教育を受け、勉強を続けられるように教材や文房具、ユニフォーム、靴を購入するために活用されました。



生活を再開するための支援物資

噴火を逃れた人たちは、着の身着のまま家を離れ、自宅や収穫物などすべてを失いました。ひとまず生活するための、日用品や衛生用品、衣類、文房具などの支援物資を提供しました。

食糧キット 卵、砂糖、油、パスタ、シリアル、牛乳、豆、小麦粉など
衛生用品キット タオル、シャンプー、歯ブラシ、下着、靴など



※各被災地での詳しい活動報告書は、HPからご覧いただけます。

現地パートナー団体「MINNASAN」 一交流で培った信頼関係一

グアテマラは、国際NGOピースボートのクルーズも定期的に訪れる国です。寄港した際には、現地パートナー団体「MINNASAN」が受け入れ先となり、グアテマラの現状を学ぶ交流プログラムを実施してきました。今回の被災者への支援活動は、「MINNASAN」を通じて実施しました。噴火災害後、11月にグアテマラに船が寄港した際には乗船者が船内で集めた募金を直接届け、仮設住宅にも訪問しました。子どもたちとも文化を通じて交流を深めました。



過去の災害に学び、未来をつなぐ

お互いの命や生活を守るため、防災・減災を学ぶ機会を提供します。
そして、有益な支援活動が実現できるよう
多様なセクターが連携し協働できるネットワークを構築します。



プログラム名	受講者数	実施回数	プログラム名	受講者数	実施回数
災害ボランティア入門(WEB検定含む)	1,060人	31回	わが家の災害対応ワークショップ	1,055人	22回
リーダートレーニング	146人	9回	支援を活かす地域力ワークショップ	365人	6回
災害VC設置訓練	753人	12回	避難所運営者研修	396人	12回
災害VCマッチングゲーム	675人	18回	講演・イベント	1,516人	41回

(2018年度)

しんじゅく防災フェスタ 2016-2018



次の大災害は、東京を襲う首都直下地震かもしれません。でも、自分が災害に見舞われる、そんな姿を一人で想像するのは難しいことです。だからこそ、1年に1回、みんなが集まって楽しく学ぶ機会をつくりたい。3年間、新宿区との協働事業として大人も、子どもも、若者も、外国人も、障がい者も、みんなが楽しく学べる防災・減災イベントを行いました。毎年、テーマを設定し、多くの方が参加しました。また、防災の担い手となるようにイベント運営にはボランティアを募集しました。PBVは実行委員会事務局として、新宿区の行政・NPO・企業・学校・ボランティアらと協力し、企画・運営に当たりました。

SOLUTION [実現したこと]

1 誰もが楽しく学べる場づくり

おもちゃ交換と防災体験を組み合わせた子どもに大人気の「イザ! カエルキャラバン!」。英語での救命講習や中国語「わが家の災害対応ワークショップ」。車いすでの避難体験などを実施しました。

IMPACT

のべ8,000名以上がイベントに参加



2 多様な組織が協働

起震車やはしご車など特別車両の体験や消防ホースでの消防訓練、NPOや企業、行政機関による多数のブースが建ち並び、様々なプログラムが体験できる場となりました。

IMPACT

参加した組織・団体50以上



3 イベント運営を通じて担い手を育成

高校生や大学生などの若いボランティアが運営に協力し、事前研修を受けてきたボランティアリーダーたちがそのまとめ役として活躍しました。地域の枠を越えた防災・減災の担い手となるでしょう。

IMPACT

未来の担い手のべ800名以上



避難所の運営者研修

一人ひとりに合った、よりきめ細かい支援を!

PBVでは、西日本豪雨をはじめ、東日本大震災や熊本地震などで被災地の避難所運営をサポートしてきました。避難所は、避難者でもある地域住民が主体となって、行政職員や施設の管理者と協力しながら運営することが望まれています。とはいえ、実際の避難所の運営は関係者のほぼ全員がはじめての体験。そんななか、日々刻々と変わる状況に合わせて、中長期にわたる避難所の環境を上手に運営するのは本当に大変なことです。

これまでの避難所の環境改善に取り組んできた事例を活かそうと、避難所運営者や支援者向けの研修を実施してきました。PBVも参画しているJVOAD「避難生活改善に関する専門委員会」では、過去の避難所で課題として挙がった「避難所あるある」について、その問題点と解決方法や工夫できることを考えるワークショップを開発しています。「食事」「衛生」「ジェンダー」などをテーマに、多様な人々が集まる避難所で個別の事情を考慮しつつ、また効率的に、みんなが気持ちよく過ごせるように運営することを検討していきます。

群馬県社会福祉協議会では、主に福祉専門職の技能を活かそうと「群馬県災害派遣福祉チーム(ぐんまDWAT)」の取り組みが始まっています。災害時には、高齢者や障がい者、乳幼児、妊産婦など、特に多くの困りごとに直面する人たちがいます。ボランティアにできることもたくさんありますが、ボランティアには難しい専門的な対応が求められることもあります。PBVでは、ぐんまDWATの新規登録者向けの講座から始まり、登録者のスキルアップを目的にした研修もお手伝いしてきました。「どう課題を見つけるか?」、そして「その課題をどう解決するか?」を、より実践的に考えてもらうためのワークを中心に一緒に検討していきます。

※詳しい研修や講演内容については、事務局までお問い合わせください

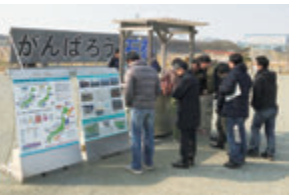




東日本大震災から8年を迎えて

東日本大震災から8年目を迎えるにあたり、3月に「災害ボランティア・トレーニング(スキルアップ編)」として、石巻市内を巡りました。参加者は、この1年でPBVのボランティアや防災・減災のプログラムに参加してくれた皆さんと石巻市在住の若者たち。震災遺構を訪れ、現在も最前線で石巻を支える団体・個人から話を聞きました。

「がんばろう!石巻」の看板が立つ門脇・南浜地区。この地区に、目の前に広がる海から7mの津波がやってきました。震災後しばらくは建物が残っていた石巻市立病院も数年前に取り壊され、駅前に場所を移しました。危険地域に指定され工事が続くこの地区の大部分は、津波復興祈念公園になる予定です。



石巻市社会福祉協議会を訪れ、支援者連携やボランティア受け入れの中心的な役割を担った阿部由紀さんにお話を伺いました。石巻が大規模なボランティアを受け入れることができた背景には、地域での地道な備えがありました。



「南浜つなぐ館」は、震災・津波の教訓と、ここに存在していた人の営みを教えてくれる施設。館内の展示を通して、2011年3月11日以前から震災直後、現在までの変化を知ることができます。市民から提供を受けた写真や遺品を預かり、ドローン撮影の映像やICT(情報通信技術)も積極的に活用した伝承施設です。



プログラムに同行してくれたのは大学生の永沼悠斗さん。大川小学校の出身で、高校1年生のときに被災しました。大川小学校で起こった出来事とその教訓を覚えてもらいました。現在も神戸や愛知の大学生などと協力し、大川地区「記憶の街」模型復元プロジェクトに取り組んでいます。



一般社団法人 ピースボートセンターいしのまき(PBI)

東日本大震災において、2011年からPBVで取り組んできた石巻での活動を受け継ぎ、東北の地域課題に取り組む地元団体として2016年にPBIとして設立しました。主な活動は漁村留学「イマ、ココ プロジェクト。」、牡蠣のオーナー制度「かきのわ」、震災から学ぶ「視察・交流プログラム」、ほやの認知向上と消費拡大「ほやほや学会」の4つの取り組みを中心に行っています。

〒986-0822
宮城県石巻市中央2丁目5-7
TEL 0225-25-5602
WEB <https://pbi.or.jp/>

SUPPORTERS



石巻専修大学 理工学部教授
坂田 隆さん(PBVサポート会員)

災害ボランティア活動を初めて見たのは2011年3月19日です。札幌で東日本大震災の発生を知り、翌日から東京の学校法人本部に詰めて、石巻に戻った翌々日です。わが家も床上浸水しましたが、もっとひどい被害の人が多くいるので支援をお願いするのをためらいました。しかし、旧知の災害ボランティアセンターの責任者に励まされて、お願いをしました。翌日、若者が4人やってきて、ぬれたフンや家電などを運び出してくれました。その後、災害ボランティアセンターは一気に大きくなりました。PBVの人たちは、マッチングから学内に突如できた大テント村の管理、支援物資の物流まで見事な腕前をふるいました。おかげで、大学も気持ちよく協力することができました。PBVのこれまでの経験や様々な分野の専門家による質の高い支援や復興期の地域振興など、被災者の自立を重視した長期的な視点を間近に見てきて、少しでもお手伝いをしたいと考えました。



Yahoo!基金 事務局長
田村夏子さん

PBVとは、弊基金が行う東日本大震災復興支援助成プログラムで、災害ボランティア入門研修実施やワークショップ開発などの活動を支援させていただいています。PBVの研修は、単なるノウハウだけではなく、被災地で迷惑をかけないための心得まで分かる実用的なもので、とても感心しました。そのご縁もあり、西日本豪雨により被災された方への支援活動に協力させていただきました。実際に、支援活動をされている岡山県倉敷市真備にも伺いましたが、PBVが運営する避難所では、子どもの学習スペースの確保や、情報の伝達漏れを防ぐために手作りの新聞が配られる等、被災者の方が快適に生活できるよう多くの工夫がされていました。現地の細かいことにも気づかれていることは感じていたのですが、実際に現場を見て、被災者視点で、寄り添って活動されていることを実感しました。今後も、災害被災地でのPBVならではの支援を期待しています。

ご協力いただいた企業・団体一覧(団体名は略称表記)

ご寄付や物資提供、イベントのご協力など、個人の方からもたくさんのご協力をいただきました。お一人おひとりの皆さまに心より感謝申し上げます。

支援活動へのご協力

アキモト酒店/味の素ファンデーション/あす街/あつみ屋/アトラス コーポレーション/アトリエ工/アレグリア みちのく復興支援プロジェクト/イー・コミュニケーションズ/石巻赤十字病院/石巻ZENKAI商店街/イタミ朝マルシェ実行委員会/伊藤園新宿支店/伊藤忠商事/イレーネ/ウーロン舎/大阪府立大学ボランティア・市民活動センター/大阪ボランティア協会/岡山市防災ボランティアネットワーク/カーネーションオフィス/課外のあらいぐま/風組関東/カタリナ/割烹スタンド松ばる/かど屋精肉店/亀田屋本店/環境再生保全機構/木の屋石巻水産/旧親麿九商店/京都府災害ボランティアセンター/串揚げつよく/クラダシ/グリーンコープ生活協同組合おかやま/グリーンコープ生活協同組合ふくおか/ケアプロ/ゲットユニバーサル/減災と男女共同参画研修推進センター/玄米ごはんとお酒 ござま/高圧化学工業/小鳥の森ゴルフパーク/コンビート/災害NGO結/災害ボランティア活動支援プロジェクト会議(支援P)/札幌市立栄中学校/サンディーズ・フラスタジオ/静岡県ボランティア協会/指定居宅介護支援事業所 はる/ジャパングレイス/シャプラニール=市民による海外協力の会/シャンティ国際ボランティア会/旬香亭あーち/浄園寺/上智大学学生センター/女性防災ネットワーク・東京/震災がつなぐ全国ネットワーク(震つな)/新宿区/新宿区社会福祉協議会/新宿区町会連合会/新宿区立障害者福祉センター/新宿消防署/新鮮組/真如苑/真如苑救援ボランティアSeRV/信賴資本財団/スターバックスコーヒー新宿三丁目店/ステートレス/スナックリカ/正栄公益基金/生活協同組合あいこぽみやぎ/生活協同組合/バルシステム東京/セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン/生活協同組合連合会/グリーンコープ連合/関根青果/セコム/世田谷ボランティア協会/全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(JVOAD)/全国社会福祉協議会/ソウルフラワー・震災基金/ソフトバンク/助けあいジャパン/旅祭/調布市市民活動支援センター/テサテブ/デンソー/東京YMCA/東京海上アシスタンス/東京海上日動火災保険(Share Happiness倶楽部)/東京災害ボランティアネットワーク/東京都生活協同組合連合会/東京土建新宿支部チームNAMAZU/東京都公園協会/東京都助産師会 新宿中野杉並助産師地区分会/東京ハンディキャップ連絡会/東京ボランティア・市民活動センター/東峰村仮設一同/トキコ・プランニング/とっとり県民活動活性化センター/トラストバンク/都立目黒高校/中瀬幼稚園/中村工務店/鳴く虫と郷町 修武館コンサートVol.10/名古屋学芸大学学生会/名古屋国際大学国際交流室/難民支援協会/難民を助ける会/にじいる保育園が丘/日本アイ・ビー・エム/日本イスラエイド・サポート・プログラム/日本財団/日本生活協同組合連合会/日本防災推進機構/函館市立湯川中学校/バタゴニア・インターナショナル・インク 日本支社/ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパン/はままつna net/ハル クラベ/バルシステム生活協同組合連合会/ハレルヤワークス/ピースウィンズ・ジャパン/フェアトレードカンパニー/福島大学/佛教慈善慈善事業基金日本分會/復興応援イベント「紫苑」/プラス・アーツ/プロサス/ヘルピングハンス日本事務局/ボランティアインフォ/まいまい文庫/マザーズタッチ/末日聖徒イエス・キリスト教会/マルバヤン電器/みやぎセルブ協働受注センター/め組JAPAN/モアザンヘブン/モバイルクリエイト/モンベル/焼き鳥おのでの/八幡家/ヤフー/ユイツナグ/ラッシュジャパン/ラブ&アース/ランド/リスタートスマイル/両国SUNRIZE/麗澤大学学生有志/レスキューストックヤード/レディゴー/ロッテ/ロバート・ウォルターズ・ジャパン/activo/AJET/Animo/ap bank/Benevity/BHNテレコム支援協議会/BISTRO OCHIAI/Book Cafe & Bar カゼノイチ/Cafe連/Chiyoda International School Tokyo/Coffee & Beer Stand ラヴィエール/CONTADINO/CWS Japan/DRT-JAPAN/Facebook/FLOW ARTS Yoga NARA/Good Neighbors Japan/gooddo/Hunter Japan/imageMILL/IP-Net/ISHINOMAKI2.0/ITDART/Japan Kingdom Builders/Jump/K space/KUROFUNE清掃隊/LIGHT UP NIPPON実行委員会/MAKE A DIFFERENCE/Micron Memory Japan,G.K/F15QE/OPEN JAPAN/P&G/Salesforce/SOY DINER/Splunk Services Japan/Syncable/Synopsys Inc. & The Synopsys Foundation/Team♡K/TMコミュニケーションサービス/TOMODACHI Initiative/U.S.-Japan Council/Wecook/Wellbe Design/WORD COFFEE/WOTA/YEN

活動地域でのご協力

あつまスタンプ会/厚真町/厚真町社会福祉協議会/厚真町商工会/安平町/安平町社会福祉協議会/安平町商工会/石狩思いやりの心届け隊/石巻市/石巻市社会福祉協議会/石巻NOTE/いざかや楽らく/ウォールペイントで、むかわの街を元気に実行委員会/おいでんせえ岡山/岡田地区まちづくり推進協議会/岡山DWAT/岡山NPOセンター/岡山県社会福祉協議会/おかやまコープ/岡山マインド[こころ]/お互いさまセンターまび/Officeあぶらーど/カリック玉島教会/川辺地区まちづくり推進協議会/川辺復興プロジェクトあるく/倉敷市/倉敷市災害ボランティアコーディネーター連絡会/倉敷市社会福祉協議会/倉敷市立岡田小学校/倉敷市立二万小学校/倉敷青年会議所/呉味地区まちづくり推進協議会/ココカラ/金光学園中学・高等学校/サンサポートオカヤマ/スマイリング/セントイン倉敷/総社市/薗地区まちづくり推進協議会/高梁川プレゼンターレ/旅商人/玉島ひょうたん会/鳥越工務店/西日本豪雨災害支援団Gorilla/二万地区まちづくり推進協議会/羽黒神社/服部地区まちづくり推進協議会/はやきた子ども園/ぶどうの家/北海道/北海道足湯隊/北海道NPOサポートセンター/北海道社会福祉協議会/はっと岡山/「街づくりまんぼう」真備写真洗浄/真備地域医療復興プロジェクト/真備船穂商工会/まびラボ/むかわ町/むかわ町社会福祉協議会/むかわ町商工会/焼きたてパン工房 Lassen/箭田地区まちづくり推進協議会/ライフタウンまび/良寛荘/MINNASAN/Team桃太郎

メディアでの紹介

[テレビ]日本テレビ[NEWS ZERO]/NHK「あさイチ」/NHK「首都圏ネットワーク」/NHK「明日へつなげよう 証言記録 東日本大震災」/KSB瀬戸内海放送/UHB北海道文化放送
【新聞】朝日新聞×3回/毎日新聞×3回/読売新聞×2回/東京新聞/山陽新聞×6回/日刊スポーツ
【雑誌・書籍】「地域防災活動活性化サポートガイド」(東京都総務局)/「熊本地震 あの時が」(熊本日日新聞)/「被災者支援プログラム集」(東京ボランティア・市民活動センター)/AERA/明日の友/小説窓・1月号/生活と自治・3月号/情報誌「経済の伝書鳩」
[ラジオ]NHKラジオ第1「ごラジオ」/TBSラジオ「荻上チキ・Session-22」/J-WAVE[HEART TO HEART]/NHKラジオ[Nらじ]/ラジオ関西/Rfラジオ日本
[ネットメディア]J-CASTニュース/J-CASTトレンド/マイナビ ニュース/TEAM防災ジャパン/生協バルシステム/KOKOCARA

PEACE BOAT GROUP



ピースボート災害ボランティアセンター
代表理事 **山本 隆**

2018年は、日本全国で地震や豪雨災害に見舞われた年でした。被災地には多くの悲しみがあり、そして生活やつながりを取り戻す力強さもありました。被災された方たちの姿は、日本全国を駆けまわる私たちの原動力になっています。その時、その場、その人に必要な支援を届けるために、多くの皆さまにご協力いただきました。ご寄付をいただいた方、ボランティアとして参加された方、有形無形のサポートをしていただいた皆さまに改めて、心より感謝申し上げます。

2018年度財務諸表

貸借対照表		正味財産増減計算書	
【資産の部】		経常収益 合計	180,304,722
現金預金	91,936,874	寄付金収入	45,260,865
未収入金	5,688,442	助成金収入	113,131,253
商品	242,236	自己負担金収入	596,750
前払費用	293,200	サポート会員収入	1,844,723
立替金	11,244	その他収入	19,471,131
流動資産合計	98,171,996		
資産合計	98,364,501	経常費用 合計	129,674,646
		事業費 計	127,273,165
【負債の部】		管理費 計	2,401,481
未払金	9,070,965		
前受金	6,416,250	当期経常増減額	50,630,076
預り金	256,716	法人税	70,000
未払法人税等	70,000	正味財産増減額	50,560,076
流動負債合計	15,813,931		
		正味財産期首残高	31,990,494
		正味財産期末残高	82,550,570
正味財産合計	82,550,570		

※財務諸表の詳細は、公式HPに公開しています。

国際NGO ピースボート

ピースボートは1983年の設立以来、世界各地を巡る「国際交流の船旅」をコーディネートしてきた非営利の国際NGOです。世界中の人々との出会いを通じて、国と国との利害関係を越えた草の根のつながりをつくることを目指して、これまでに100回以上の航海を行ってきました。世界200以上の国と地域を巡り、のべ8万人以上の方が参加しています。2016年には、国連「持続可能な開発目標(SDGs)」の公式キャンペーン船として認定されました。

WEB <https://peaceboat.org/>

※ピースボートは、国連経済社会理事会との特別協議資格を持つNGOです。

一般社団法人 ピースボート災害ボランティアセンター

ピースボート災害ボランティアセンター(PBV)は、東日本大震災を受けて2011年4月に設立された一般社団法人です。「国境を越えた災害支援は、地域や世界の平和をつくる」という国際NGOピースボートの想いを受け継いで、「国内外の災害支援」、「防災・減災の取り組み」、「東北への支援」を中心に活動を行っています。



JOIN US

すべての人々がお互いに助け合える社会へ、皆さまのご支援をお願いします。

ピースボート災害ボランティアセンターの活動は、皆さまのご支援で支えられています。

皆さまからお預かりした寄付金・募金は被災者・被災地の支援活動や防災・減災教育活動の活動費として大切に使用させていただきます。

最も寄付を必要としている課題

緊急支援

災害発生時に、いち早く被災者の支援活動を開始するための支援金

現状は災害が発生してから、社会的注目が集まり、寄付行為が行なわれます。事前の備えとして、災害時に活用できる準備金があれば、より円滑に早く、現地調査・支援活動を開始できます。まさに被災者の困りごとに応えて、必要な支援活動を展開するための資金になります。



会員になって応援する

サポート会員

【年会費】[個人]一口**5,000円** [団体]一口**100,000円**

※二口以上のご協力も可能です。お支払いは、郵便振替・銀行口座・クレジットカード決済からお選びいただけます。

【会員特典】

- ・ニュースレター「START」と年次報告書をお送りします。
- ・各種講演会・イベントを優先してご案内いたします。
- ・会員同士の集いの場に、ご参加いただけます。

詳細はこちらから —>
<https://pbv.or.jp/support-member>



自由な金額の寄付で応援する

今回のみ寄付

定額・連続ではない、その都度、自由な金額でのご寄付もありがたくお受けしております。お支払いは、郵便振替・銀行口座・クレジットカード決済からお選びいただけます。

詳細はこちらから —>
<https://pbv.or.jp/donate/donate>



委託事業

平成30年度新宿区協働事業「地域防災の担い手育成事業」[新宿区]／第3回災害時の連携を考える全国フォーラム 企画準備・当日運営[全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(JVOAD)]

加盟団体・ネットワーク

おおさか災害支援ネットワーク(OSN)／国際協力NGOセンター(JANIC)／国連国際防災戦略事務局(ISDR) Making Cities Resilient: My City is Getting Ready／ジャパン・プラットフォーム(JPF)／震災がつなぐ全国ネットワーク(震つな)／新宿NPOネットワーク協議会／全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(JVOAD)／東京都災害ボランティアセンター アクションプラン推進会議／日本NPOセンター(JNPOC)／東日本大震災支援全国ネットワーク(JCN)／防災・減災日本CSOネットワーク(JCC-DRR)／民間防災および被災地支援ネットワーク(CVN)／NGO安全管理イニシアティブ(JaNISS)／Quality and Accountability Network Japan(JQAN)／The Global Network of Civil Society Organisations for Disaster Reduction(GNDR)

助成元一覧

アジア・コミュニティトラスト(ACT)／ウェスレー財団／ジャパン・プラットフォーム(JPF)／中央共同募金会／日本郵便／パルシステム生活協同組合連合会／Yahoo!基金／ゆめ風基金





2018年度 活動報告書

発行：一般社団法人ピースボート災害ボランティアセンター

発行日：2019年6月25日

編集：小林深喜、上島安裕

デザイン：森大樹

写真：Ueno Yoshinori, Chiga Kenji, Nakamura Mitsutoshi,
Suzuki Shoich, Kataoka Kazushi, Takahashi Masaki, Joel Dardon

この刊行物に関するお問い合わせは下記までお願いします。

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場3-13-1-2F-A

TEL：03-3363-7967

FAX：03-3362-6073

E-MAIL：kyuen@pbv.or.jp

URL <https://pbv.or.jp/>